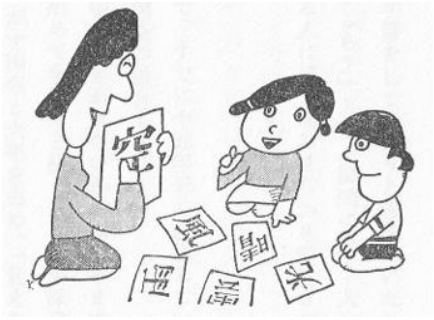
石井勲の漢字教室

別巻 母と子の実践教室

I 子どもはみな神童

II 漢字で遊ぼう

——漢字に親しむための実例集



第一章 子どもは漢字が大好き！

漢字で遊ぶ 楽しさとは

「子どもは漢字が大好き！」と章題を付けましたが、これから漢字学習をしてみようと思っていたり、あるいはまだ始めたばかり、というお母さん方の中には、「ホントかしら？」と少々疑問に思う人もあるかも知れません。まして、かつて漢字に苦しめられた経験のある人には、なおさらかも知れません。

そこでホントかウソか、少々例を引いてみましょう。

まず、石井方式漢字学習を実践し始めてから、昭和五十八年現在で、すでに十五年近く経過している石川県金沢市のかわい学園で、以前に試みた園児からの聞き取り調査の場合——

「園児二十七人に聞いてみました」というわけで、一人ひとりに漢字が好きかきらいか尋ねてみますと、好き＝二十四名、きらい＝三名という結果でした。漢字学習を始めて半年ほど経った、二年保

育のあるクラスの数字です。好きな理由としては、「おもしろいから」が十四名と大半を占め、「覚えられるから」「わからないけど好き」「毎日しているから」「覚えたいから」などと続きます。きらいな理由は、「わからないから」と「たくさんあるから」の二つだけ。

サンプル数がやや少ないと思われるかも知れませんが、この質問を試みたかわい学園の主事である山田稔先生によれば、子どもたちは、みな一様にニコニコ顔で「好き」と答えていたそうで、「きらい」といった子どもも、家の中やバスの中などで、知らない漢字をお母さんに教えてもらいたがっていたとのことですから、全く興味がないわけではありません。

さらに、同じ園児たちにこんな質問をしています。——わからない漢字を見たら、おかあさんに尋ねますか？その時、おかあさんは教えてくれますか？

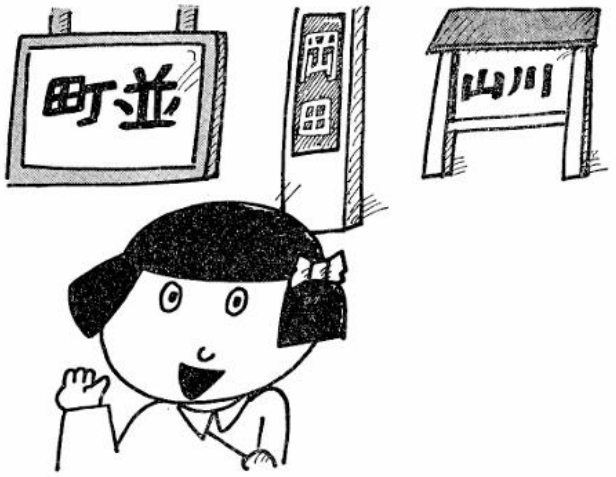
尋ねる＝十九名、尋ねない＝八名、教えてくれる＝十八名、教えてくれない＝九名。

という結果が出ました。子どもは興味、関心を持てば、つまりそのことが好きならば、いつ、どこででも、わからないことがあれば教えてほしいと願っているのがよく理解できます。

この質問で、「尋ねない」と答えた子どもと「教えてくれない」と答えた子どもの数がほぼ同じなのは、子どもが初めからお母さんに尋ねなかったのではなく、聞いても教えてくれなかったから、とうとう、尋ねないようになってしまったのではないか、というのが山田先生の分析です。同時に、質問に答えてあげないお母さんは、結局、自分で自分の子どもの成長の芽をもぎとっていることになるとも、山田先生は指摘しています。

もう一つの例ですが、こちらも十五年以上にわたり、漢字学習を行なってきた神奈川県川崎市のひかり幼稚園の吉田尚弘園長が、漢字学習の成果についてある講演の席上述べていたこと——

「……まず園内が知的な活力で明るくなりました。子どもたちにはいろいろなゲームをして遊ばせますが、何といっても漢字ゲームほど喜ぶものはない。どの子も眼がいきいきと輝き、動作が活発になり、積極的な気質が眼に見えて醸成されてきました」と漢字学習のすばらしさを強調していました。



実践したお母さん方の驚き

こうした調査や報告は、実はもっともっとたくさんあるのですが、それは本書のⅣ「いま全国の実践幼稚園で……」を参照していただくことにしましょう。そこには〝漢字で遊ぶ〟楽しさを覚えた子どもたちの織り成すエピソードが、様々に語られています。「新聞の拾い読みをしているのを見てお客様がびっくりした」「兄、姉より漢字がたくさん読めるので、上の子もやる気を起こした」「電車の駅で迷子になったが、途中乗り換えが三回あるのに、駅の案内板を見ながら無事に家へ帰ってきた」等々……。

それでも、このようなことは、ベテランの先生方が長い経験と知識を生かし、熱意を持って教育に取り組んできた成果である、と思い込んでしまうお母さん方もあるかも知れません。ところが、そういうベテランの先生方や、そしてこの石井方式を研究、実践してきた当の石井勲先生も自ら「親こそ最良の教師である」と繰り返し説かれています。前に出てきた園児への質問項目「わからない字をお母さんに尋ねますか?」の結果とその分析を見ても明らかなように、親の果たす役割は大きなものがあるといわざるをえません。第一、こうした漢字教育を実践する幼稚園や学校が近辺にないとなれば、「親こそ……」との確信を持つ必要性はいよいよ増してくるでしょう。

といっても、肩ひじ張る必要は全くありません。とにかく〝漢字で遊ぶ〟ように心がければいいのですから。

それでも「わたしにできるかしら?」と思っている方に、実際、子どもと漢字で〝遊び始めたばかり〟のお母さん方の声を少しお聞かせしましょう。

これは、昭和五十八年の春先、前出のかわい学園で行なわれた石井勲先生の講演を聴いて、しばらくしてから出されたお母さん方の感想文から取ったものです。石井先生のお話は、丁度、本書の1「子どもはみな神童」を要約されたものと考えていただければ結構です。

「あれから（講演を聞いてから＝註）、カードを見せて『これはなあに?』とやってみますと、うれしそうに答えます。母親との会話の一つのように感じているように思いました。とかく、何か教えたりしようとする時は、坐らせて、紙に書かせて……となりがちですが、子どもはお友だちと遊びたくて、お天気のよい日はとくにそれどころではないようです。石井先生の方法ですと、ちょっと着替えをしている間とか、おやつの前とか時間も取らないからでしょうか、子どもも喜んでやります」（五歳児の母親）

「石井先生のお話を聞き、とても勉強になりました。私自身、小学校のころ漢字ってむずかしい、いやだなと思っていました。（中略）具体的に自然に、漢字と接していると、子どもはいやだなという気持ちにはならないと思います。入園式で漢字を見た時は〝えっ〟と思いましたが、子どもたちはすぐに覚えてしまいました。かなよりも漢字の方が理解しやすいのですね」（五歳児の母親）

「私は、最初は、三歳から漢字を教えるのに少しとまどいを感じておりました。しかし、少しずつやってみると、意外に私が思っているより速く、子どもは漢字を覚えるようでした。ほんの少ししかやっていないのですが。（中略）子どもは喜んでカードを持ってきて『これなあに?』とかよく聞くものですから、教えたりするとすぐ覚えます。やっぱりこれくらいの子は覚えるのも速いのでびっくりしております」（四歳児の母親）

「先生のお話を聞く機会が持てたこと、大変うれしく思いました。お話や著書を参考にしながらやり始めました。（中略）知らない漢字を一日七文字ずつ、一週間繰り返して見せたあと、一覧表にし、その次もまた知らないカード七枚を繰り返す、という作業を続行中です。最初から興味を示してくれていたためとてもやりやすく、今朝も自分から起きがけに漢字カードの箱を下げてきて、『お母さん、早くやって』とせかしてきました。台所にいて、心の準備もできておらずとまどいましたが、やはりその言葉がうれしくてさっそく尋ねてやりました」（三歳児の母親）

母と子が、対話を、ふれ合いを深めながら、楽しく漢字で遊んでいる様子がよくわかるでしょう。いずれも、まだまだ始めたばかりのお母さん方の声です。もちろん、ごく少数ですが、次のような感想のあったことも付記しておきましょう。

「幼稚園の子、小学一年の子、小学四年の子と漢字カードを見せながら順番に読ませるのですが、先の二人で答えてしまい、四年の子の順番がなかなか回ってこなく、結局『わたしも幼稚園の時から

教えて欲しかった』といいました。この一言に胸を痛めながら、取り返しのつかない失敗をしたような気持ちになっております。それでも、三人の子どもたちが、漢字に思いがけない魅力を持ってくれたこと、親として言葉にいいつくせないものを感じております」（四歳児の母親）

楽しく遊ぶための「十ヵ条」

いろいろな人の教え方や考え方を、実例として紹介してみました。これらを参考にして、いよいよ実際にどう遊んだら、楽しく成果をあげることができるか、という点に入るわけですが、その前にもう少しだけ「心構え」というと大げさですが、気を配っていただきたいことについてふれてみたいと思います。

これは、石井勲先生を始め、全国各地で子どもたちの指導に当たっている先生方のご意見を、まとめてみたものです。箇条書きにしてみます。



(1) 漢字を子どもに押し付けてはいけません。関心を示さない時に無理強いしても、まず効果はありません。

(2) 子どもにとって身近で具体的なものの漢字から始めることです。抽象的な意味の漢字はあとから自然に身に付いてきます。

(3) 漢字を読めた時、必ずほめてやることが大切です。より一そう意欲を示してきます。もし失敗したり間違えても、絶対にしかってはいけません。やる気をそぐ原因になります。

(4) 忙しい時に「遊んで」といわれた場合「今はダメ」と拒否しないように努めましょう。その時、子どもは意欲満々の状態にあるのですから。

(5) 漢字になかなか興味を示さなくてもあせりは禁物。ち

よっとした キッカケで関心を示してきます。遊び方に工夫をしてみるといいでしょう。

(6) 一回に行なう時間を余り長くしない方がいいでしょう。ダレてしまうと効果もダウンします。

(7) 一度覚えた漢字も、そのままにせず、機会があれば目にふれるようにします。記憶がさらに確実となります。

(8) 子どもは繰り返しが好きです。お母さん方にとっていやになることもあるかも知れませんが、極力それに応じてあげたいものです。

(9) (8)と関連しますが、子どもは自分がすでに聞いたことのあるお話や、見て覚えている漢字に出くわした時「知ってる!」と強調しますが、これは「知ってるからもういい」という意味ではなく「もっとやって」との気持ちの表われですから安心して続けていいのです。

(10) できるのかできないのか、覚えたのか覚えていないのかと、結果を試してはいけません。子どもはいつも試験を受けているような緊張した状態になってしまい、〝漢字で遊ぶ〟楽しさなど感じられなくなり、ひいては漢字ぎらい、読書ぎらいと、まるで逆の結果をもたらしてしまいますから。

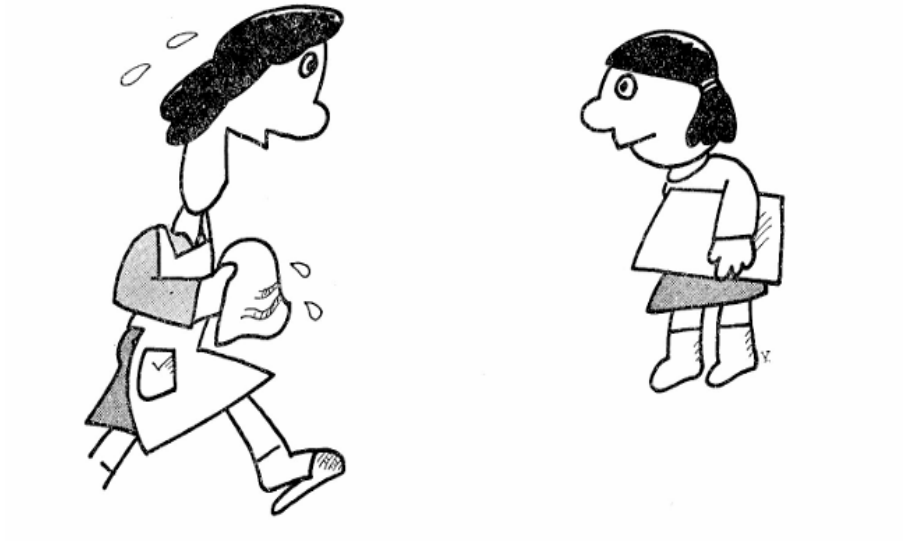
この他にも、様々な留意すべき点があるかと思われますが、いずれにしても〝子どもはみな神童〟――子どもの持つすばらしい能力にはいささかも疑いをはさむ余地はありません。このことをしっかりと念頭に置いて、子どもたちを楽しい漢字遊びの世界に連れて行ってあげましょう。

第2章 楽しく遊ぶための「実例」あれこれ

さて、漢字を「これは〝象〟これは〝猿〟」と、カードで示すだけでも、子どもは驚くほどの吸収力、記憶力を発揮し、どんどん覚えていきます。子どもにとって身近な名詞の場合、この方法でも十分に成果は表われますが、形容詞、動詞の領域に入っていきますと、どうしてもやりにくさが出てきてしまいます。そこで、以下に書かれたような様々な遊び方が参考になるでしょう。それに、カードを示す場合でも、単にその漢字を読みあげるだけでなく、色々なものや状況と関連させて提示すれば、よりいっそう印象的に記憶されるはずですし、同時に遊び方が変化に富んでいればいるほど、子どもにとって楽しさも増すというわけです。

ここでは、大体のところ、別巻の漢字カードの配列にならい、そして、子どもの発達の段階に沿って、おおむね、やさしい遊び方から比較的むずかしい遊び方へと、順次に配置してあります。もちろん、この配列が絶対の基準であるわけではありません。あくまで目安と考え、臨機応変に、子どもが示す興味と関心に応じて、遊び方を選択し、工夫したりしてください。ただし、留意していただきたいのは、その「やさしい、むずかしい」という意味は、決して漢字のやさしさ、むずかしさとイコールではない点です。石井先生が実証されているように、子どもにとって虫より蟻が、鳥より鳩がはるかに〝やさしい〟漢字なのです。字画数や字の複雑さからいえば、その逆ではありますが、虫一般、鳥一般はこの世に存在しません。あくまで抽象的な概念なのです。ところが、子どもには、蟻や鳩は最も身近で具体的で、いってみれば日常的に見聞きする生きた存在なわけですから、なんとも容易にその漢字を覚えることができるのです。

それでは、こうした身近なところから、子どもと漢字で遊び始めてみましょう。



一日十分でも毎日続けよう

「漢字で遊ぶ」にはどういうやり方があるのか、どうしたら楽しく、効果的にできるのか、という本題に入ります。

忙しい日々の中で、子どもと遊ぶ時間もそうそう長くは取れないかも知れませんが、いずれにしても、短時間であっても毎日欠かさず遊んであげたいものです。一日にほんの十分でもかまいません。それなりの方法はあるのですから。とにかく実行することが大切なのです。

ー 身近な名詞を中心にした遊び方

〈人体図ゲーム〉

その名の通り、人間の体の部位をそれに該当する漢字で示します。さしあたり「顔」の部分から始めてみましょう。

※用意するカード 耳、口、目、鼻、頭

画用紙や模造紙に顔を大きめに書きます。該当する部位にカードを置さながら読みあげていきます。これを何回か繰り返した後、今度は子どもにさせてみましょう。自分でカードを置くようになったら、記憶は一段と深められたといえます。

この遊びは、人間の顔だけに限定する必要は全くありません。猿でも象でも、絵を示してその部位を漢字で当てさせることができます。

さらに変化をつけ、動きを持たせた遊び方もあります。

〈タッチゲーム〉

※用意するカード 頭、顔、手、足、指、首、肩など

最初にお母さんがお手本を示してみましょう。カードを見せながら、子どもの体の、漢字に該当するその部位をタッチします。「ハイッこれは〝足〟」とカードを読みあげて、足におさわり、というわけです。頭、顔、手……とこれを繰り返します。慣れてきたら、ジャンケンをして、勝った方がカードを見せて、負けた方がタッチ、と変化をつけて楽しく遊んでみましょう。

〈食べものゲーム〉

子どもの大好きな食べものは、何といってもカレーライス。一体、何が材料になっているのか、どうやってつくるのか、子どもにとってきっと関心のあるところでしょう。そこでカレーライスをつくりながら、材料にする食べものを漢字で示してみます。といっても、本当につくりながらではありませんが。

※用意するカード 人参、玉葱、じゃが芋、豚肉、鍋



これらの漢字カードと、カレールーの空箱、それにちょっと大きめの鍋があればなお結構でしょう。

カレーライスをつくる手順にそって、鍋にカードを入れていきます。もし、わかりにくそうならば、本物の人参や玉葱を用意するなり、あるいは簡単に絵をかいて、それと一緒にして鍋に入れて遊んでもいいでしょう。子どもの大好きなカレーライスのつくり方に、きっと興味をそそられること間違いなし。

もちろん、カレーライスだけにこだわる必要は全くありません。スキヤキ、寄せ鍋、あるいはお弁当などで応用しても、楽しさは変わらないでしょう。

〈仲間あつめ〉

動物、乗り物、植物など、同じ種類のカードで遊ぶもの。ここで注意したいのは、「仲間」という言葉が子どもにとって少々理解しにくいかも知れないことです。ですから、「仲間」の説明に余り深入りしないで、動物なら、足が四本あって自分で歩くものとか、乗り物でしたら、人が乗って遠くへ行くもの、動くものが、それぞれの仲間という意味ですよと、サラッと説明する方がよいでしょう。

(1) 動物の仲間

犬、猫、馬、牛、豚、羊などのカードを使ってみましょう。単調になりそうでしたら、動物の泣き声で当てさせるのも楽しいでしょう。

「泣いた、泣いた、なあにが泣いた、ニャオー」

「猫！」

「ハイ これが 猫」という具合で、順番に試してみる方法です。

(2) 乗り物の仲間

電車、汽車、自動車、自転車、三輪車などを使います。自転車や三輪車は、もし家にあったら、漢

字カードをつくって貼っておいてもいいでしょう。電車や汽車などは、絵とともに、漢字を示しても結構です。

これらはいずれも陸上を走る乗り物ですが、「では空を飛ぶものは？ 海や川を渡るものは？」というふうに、飛行機、船と、広げていくこともできますし、自動車のなかにも色々と種類がありますから、消防自動車、救急車と、用途別の自動車を漢字で表わす工夫も可能になります。いずれにしても、同じジャンルに属する漢字を示すことで、一そうわかりやすく覚えるのが、この遊びのねらいといえます。

桃、柿、栗、梨、苺などのくだものを集めたり、梅、桜、菊、椿などの花を仲間として示す方法、あるいは、雨、雲、雪、風などの自然現象を用いたり……と様々に選択して遊んでみてください。

〈仲間はずれ〉

〈仲間集め〉の遊びに慣れてきたら、その反対の〈仲間はずれ〉遊びもやってみましょう。

※用意するカード 犬、猫、馬、牛、豚、電車、桃など

これらのカードを読みながら、順不同に並べていきます。そのあと、子どもに読ませてみます。

そこで、

「動物の仲間でないのはどれ？」

と尋ねてみましょう。

段々と種類を多くし、カードを増やしていきます。いきなりたくさんのカードを並べずに、やってみることです。もしわからなければ、もう一度〈仲間集め〉遊びにもどってください。あせりは禁物。何回でも繰り返すのがコツです。

こうして、三種類ほどの〈仲間集め〉ができるようになり、〈仲間はずれ〉にも慣れてきたら、少し〝複雑〟な遊び方に移ってみましょう。

「動物」「乗り物」「くだもの」カードを各五枚ずつそろえ、トランプのようにきってまぜてしまいます。それを一枚ずつ上から取らせて、それを読ませ「これは何の仲間かな？」と聞きます。答えたら、下に置かせます。これを順番に一枚ずつ分類しながら漢字を読むのです。三種類、計五枚ずつのカードが山になったら正解というわけです。

〈仲良しさん〉

これは〈仲間集め〉の〝変形〟の遊びです。子どもの興味に応じてテーマを選び、それぞれの漢字と〝仲良し〟の漢字を見つけさせるものです。ここでは、最初に出した身体に関係する漢字を使ってみます。

※用意するカード 頭、目、手、足、帽子、眼鏡、手袋、靴

まず、帽子、眼鏡、手袋、靴の漢字を読みます。そのさい、〝頭にかぶる〟帽子、〝手にはめる〟手袋……と少し説明しながら読みます。実物があれば、それを見せて漢字を示してもいいでしょう。

つぎは、子どもに、自分で仲良しさんの漢字を当てさせます。頭――帽子、目――眼鏡、手――手袋、足――靴、というようにカードを拾って読ませるわけです。

花――花瓶、雨――傘、指――爪、箸――茶碗、馬――人参、鍋――釜……とたくさんできるでしょう。

〈なぞなぞ遊び〉

これは一種のカルタ取りです。カードを並べておいて、お母さんがなぞなぞをいい、答えを考えさせて、わかったらカルタ取りの要領で、カードを拾わせる方法です。これまでに提示した漢字と、いくつかの新しい漢字でつくったなぞなぞを、順不同であげてみます。もちろん、なぞなぞの「内容」はこれに限るわけではありませんから、よりおもしろいものを考えてみてくだ さい。



（例）

赤い顔をして、ひっかくこともある動物は何?

〔猿〕

ここ掘れワンワンといった動物は何?

〔犬〕

お空にフワフワ浮んでる白いものは何?

〔雲〕

ピカッと光って、ゴロゴロ、ゴロゴロっておこりんぼうなのは何？

〔雷〕

お馬さんの大好きな食べものは何？

〔人参〕

いつも早起きコケコッコーって鳴くのは何？

〔鶏〕

リーンと鳴ったらモシモシっていうのは何？

〔電話〕

雨の日にチャップチャップって歩く時にはくのは何？

〔長靴〕

花から花へヒラヒラ飛んでいくのは何？

〔蝶〕

いくらでもできそうですが、子どもの読める漢字が一定数になったら、カルタ遊びのつもりで、なぞなぞをつくって試してみてください。また、お母さんから子どもへと〝一方通行〟にやるだけでなく、子どもに、ごく簡単ななぞなぞをつくってもらうのも楽しく遊べる方法でしょう。

《買いものゲーム》

子どもに身近なお店屋さんを選んで、お母さんと一緒に買いものをする遊びです。八百屋さんを例にとってみましょう。

※用意するカード　大根、人参、玉葱、じゃが芋、梨、苺

子どもが八百屋さんになり、お母さんが買いものに行きます。

「もしもし八百屋さん、大根ひとつくださいな」

などとお母さんがいって、並んだカードの中から大根のカードを子どもに探させてみます。これを順番に繰り返します。

立場を変えて、お母さんが八百屋さんになったりして変化をつけてみましょう。そのさい、わざと間違えて、「大根」と子どもがいったら「人参」を選んでみたりしてみるのもおもしろいでしょう。あ

るいは前に出てきた〈仲間はずれ〉遊びを応用して、野菜のカードの中に、自動車とか時計のカードをまぜておき、「八百屋さんに売ってないものはなあに?」と問いかけてみるのも、遊びに、より変化が出てきて楽しくなります。

〈品物あてゲーム〉

お部屋の中で、手軽に持ち運びのできる品物の漢字カードを見せて、その品物を実際に持ってこさせる遊びです。別巻の漢字カードの中からいくつか選んでみましょう。もちろん、事前にその品物に該当する漢字を何回か読みあげてからやってみます。

※用意するカード 新聞、鉛筆、鋏、絵本、帽子、手袋、箸など

これとは反対に、持ち運びのできない品物を当てさせるゲームもできます。漢字カードでその品物を示し、それを当てさせればいいわけです。

冷蔵庫、花瓶、洗濯機、机、椅子、布団、畳、戸棚などのカードを見せて、「ハイ、どこにありますか」と問いかけてみます。その品物のあるところへ行って、実際に指をさすようにするといいでしょう。

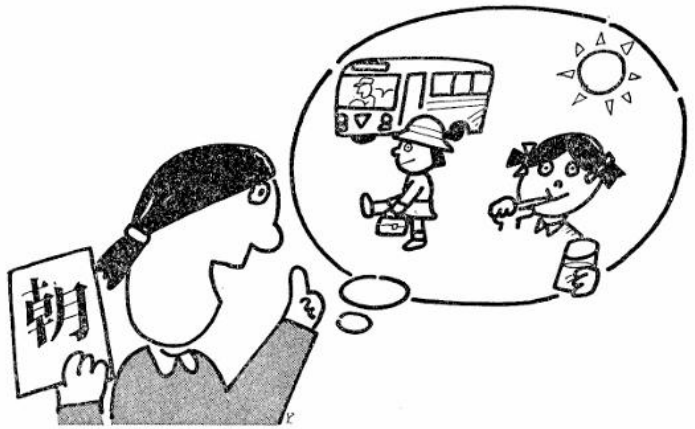
このような、身近にありながら、いつでもサッと取り出すわけにはいかないものの場合、あらかじめ漢字カードをつくって、それに貼っておいてもいいのです。柱、壁、障子、廊下、階段、便所、風呂……と、いくらでもあります。折りにふれ、「これなあに?」と問いかけてみましょう。きっと、自慢げに「柱!」「壁!」と答えるでしょう。

〈家族探しゲーム〉

お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん、弟、妹といった家族に関する漢字を提示するゲーム。前に出したなぞなぞ遊びに近いもので、若干、ストーリー風に遊んでみましょう。お話をしながら、そのつど漢字カードを示してください。

「〇〇ちゃん（子どもの名前）のお父さんとお母さんはとっても仲良しです。お父さんは朝、会社へ行きます。お母さんは洗濯をしたりごはんをつくったりします。お兄さん（お姉さん）は毎日学校へ行きます。学校から帰ると、お兄さん（お姉さん）は〇〇ちゃんと遊んでくれます」……

これに慣れたら、お話に出てくるカードをならべておいて、子どもに「お父さんと仲の良い人はだれ?」とか「毎日、学校へ行くのはだれ?」となぞなぞ風に尋ねて、該当するカードを拾わせてみて



ください。こんなふうに家族構成に合わせて、お爺さん、お婆さん、弟、妹を登場させ、一日の生活のストーリーに織りまぜて漢字を読みます。よくわかるようになったら、逆に子どもに家族の漢字カードを使って、ごく簡単なお話をつくらせてみましょう。

これを発展させると、子ども自身の一日の生活を追っていくことで、家族だけでなく、もっと広がりを持ったお話の中に、様々な漢字を織り込ませることができます。一方的にお母さんが語りかけるだけでなく、子どもとの話し合いを通じて、漢字を示すようにしてみましょう。

（例）

朝起きてから顔を洗って歯をみがきました。それから、バスに乗って幼稚園に行きました。先生と漢字で遊びました。昼にみんなでごはんを食べました。幼稚園には男の子も女の子も大ぜいいます。おうちに帰ってきてから友達の○○くん、○○ちゃんとも遊びました。夜になるとお父さんも帰ってきました。お父さん お母さん（お兄さん お姉さん 弟 妹……）と一緒にごはんを食べました。

これだけで十いくつの漢字が出てきます。もちろん、これらの漢字を一度に全部提出する必要はありません。家族や友達に力点をおいたり、一日の時の流れに重点をおいて「朝」「昼」「夜」を理解させたりと、変化を持たせましょう。要は、子どもの興味、関心がどこに向いているかを察知して、話を進めることが大事なのです。

もし、日曜日に公園や遊園地で遊んだことが印象に残っているようでしたら、「公園」「遊園地」「滑り台」「砂場」「噴水」「鉄棒」といった漢字カードで遊べるお話をしてあげればいいし、病気になって病院へ行ったことが、強く印象付けられているならば、「病気」「病院」「薬」「包帯」「注射」「医者」「歯医者」などのカードを使ってみてください。子どもたちにとって、生活に密着した身近で興味深い内容であるほど、驚くような記憶、理解力を示すことでしょう。

2 名詞を中心にした遊び方――さらに変化をつけて

それでは名詞を中心にした漢字遊びにもっと変化をつけたものに移りましょう。数十かそれ以上の漢字が読めるようになったら、次のようなゲームをして楽しんでみてください。

〈サイコロゲーム〉

漢字カードがすっぽり入るような箱を六つ用意します。各々の箱に(1)から(6)まで番号をふっておき、中にカードを均等の量にして入れておきます。

そこでサイコロをふり出します。(1)と出たら(1)の箱の中の漢字を取り出して読ませてみます。たまには攻守ところを変えて、お母さんが、子どものふったサイコロの数に合わせて箱の中のカードを読みあげてみましょう。

もし、近所の子どもたちが遊びにきていたり、あるいは家族も一緒になって、人数が六人いたら、各々(1)から(6)までの番号札を持っていて、順番にサイコロをふって、数が出たら、その数に該当する番号札を持つ人が、重ねてある漢字カードを読んでいくのもおもしろいでしょう。みんなでワイワイガヤガヤと騒ぎながら楽しくゲームができます。

〈置きかえ遊び〉

なるべくジャンルの違う漢字カードを五、六枚用意します。まず子どもにこのカードを見せて読みあげさせます。そのあとカードを一列に並べ、順番をよく覚えさせ、後ろを向かせてからカードの順番をサッと変えてしまいます。ふりむいた子どもに、カードを元の順序に並べ直しをさせるわけです。大きい声で読みあげるように、ゆっくりとやらせ てみましょう。二、三回別なカードを使って遊んだあと、もし間違って並べたカードが数枚になったら、今度はそのカードだけを取り出して並べ、同じように繰り返してみましょう。その次にはきっと順序通りに並べ、記憶もより深まるというものです。

〈〝あ〟の字のつく漢字はどれ〉

文字通り、(あ)の字のつく漢字を探す遊び。最初は(あ)と(い)の二種類のカードを使ってみましょう。

※用意するカード 雨、足、頭、犬、池、石

箱を二つ用意して、それぞれに(あ)と(い)のつく漢字を選ばせて箱に入れます。

これではすぐに終わってしまいますが、まずは遊び方をのみ込んでもらうため。慣れたら、(あ)(い)(う)(え)(お)の五種類にトライしてみましょう。五つの箱を用意し、それぞれに(あ、い、う、え、お)と書いておきます。

そして次の(例)のような漢字をバラバラに並べておいて、それを、あいうえお順に箱に入れていきます。

(例)

(あ)……雨・足・頭

(い)……犬・池・石

(う)……海・兎・馬

(え)……鉛筆・駅・煙突

(お)……女の子・男の子・弟

さらに手を加えて、〈仲間はずれ〉の要領を含める遊びもできます。(あ)の仲間にあの字のつかない漢字をまぜておいて、「(あ)の字の つかない漢字はどれ?」と、違う漢字を拾わせます。



〈文字隠しゲーム〉

お母さんが漢字カードを何枚か手に持って子どもに見せるのですが、漢字を全部見せずに、カードを少しずつずらして、上や横の方を一部分出します。少しずつ見せていって、「ハイッ何の字かな」と当てさせる遊びです。興味をそそられて、子どもはジッとカードを凝視。わかると叫ぶようにして読みあげます。当てたら「良くできたわね」と必ずほめてあげてください。

〈フラッシュゲーム〉

漢字学習の実践園では、必ずといっていいほど、この遊びをやっています。漢字を相当数、間違いなく読めるようになったらぜひ試してみてください。カメラのフラッシュがパッパッと点滅するように、子どもに漢字カー

ドを一瞬のうちに読み取らせる遊びです。二、三十枚のカードを持って、トランプの札をきるようなスピードで次々に漢字を見せ、瞬時に読ませます。カードをめくる間隔を長く取らず、サッサッとリズムに乗せてどんどん見せてください。子どもは、よく読める漢字ですと「犬、猿、熊、雨、雲、海……」と、驚くような速さで読みあげることがで きます。

〈歌詞探しゲーム〉

いよいよ名詞を中心にした遊びの最後となります。このゲームは、子どもの大好きな歌をお母さんと一緒に歌いながら、歌詞の一部を漢字カードで探すというもの。最初は余りテンポが速くなく、子どもが良く知っている漢字が歌詞に使われている歌で遊んでみましょう。名詞に 限らず、漢字への理解が深まり、よく読める漢字の数が増えていくにしたがい、テレビ番組の主題歌でも流行歌でも、楽楽と一そうゆかいに遊べるようになるでしょう。

少し例をあげましょう。□の中がカードで探す漢字です。子どもの前にこれらのカードを並べておいて、まず歌う前に一通り読めるかどうかを確認してください。それからゆっくり歌いながら、子どもに歌詞に該当するカードを拾わせます。最初はお母さんがお手本を見せてあげると良いでしょう。

(例) 童謡「象さん」

象さん 象さん
お鼻が長いのね
そうよ母さんも長いのよ

象さん 象さん
だれが好きなの
あのね母さんが好きなのよ

漢字は「象、お鼻、母さん」の三つだけしか出てきませんが、「長い、好き」なども読めるようになったら、それを取り入れてやってみてください。

(例) 唱歌「月」

出た出た 月が
丸い丸い まん丸い

盆のような 月が
かくれた 雲に
黒い黒い まっ黒い
墨のような 雲に

また出た 月が
丸い丸い まん丸い
盆のような 月が

ここでは「月、雲」を漢字で探してみます。もちろん、「盆、墨」が読めればそれを織り込んでみてください。

漢字で遊べる歌はいくらでもありますが、このようにしてお母さんと子どもが一緒に歌うのにぴったりで、出てくる漢字も比較的覚えやすい歌として、石井先生がピックアップされたものとしては、以下の歌があります。参考にしてください。



「チューリップ」♪咲いた 咲いた チューリップの花が……

「海」♪海は広いな大きいな 月が昇るし 日が沈む……

「たき火」♪かきねの かきねの 曲り角 たき火だ たき火だ 落葉たき……

「かもめの水兵さん」♪かもめの水兵さん 並んだ水兵さん……

「ままごと」♪ままごとしましょう 花シャベル……

「仲よし小道」♪仲よし小道は どこの道 いつも学校へ

みよちゃんと……

「夕日」♪ぎんぎんぎらぎら 夕日が沈む ぎんぎんぎらぎら 日が 沈む……

「雪」♪雪やこんこ あられやこんこ 降っては降っては……

「サッちゃん」♪サッちゃんはね サチコっていうんだ本当はね……

「春よ来い」♪春よ来い 早く来い 歩き始めたみいちゃんが……

「赤とんぼ」♪夕焼け小焼けの 赤とんぼ 負われて見たのは いつの日か……

「どこかで春が」♪どこかで春が 生まれてる どこかで水が 流れ出す……

「青い目の人形」♪青い目をした お人形は アメリカ生まれの セルロイド……

「ペチカ」♪雪の降る夜は楽しいペチカ ペチカ燃えろよ お話しましょ……

「七つの子」♪烏なぜ鳴くの 烏は山に かわいい七つの子があ るからよ……

「赤い靴」♪赤い靴はいてた女の子 異人さんにつれられて行っちゃった……

3 形容詞と動詞を中心とした遊び方

いままでの遊びのなかで示された漢字は、ほとんどが名詞でした。といっても、実際には、名詞だけで遊べたわけではなく、お話のなかや、歌のなかでそれに付随して様々な言葉が用いられていたはずです。「漢字」として示されなくても、子どもはそれを耳にし、十分に理解し、自らも色々な場面で使っているわけです。

象のお鼻は〝長い〟――。この場合〝長い〟という言葉の意味は、漢字を知るまでもなく、子どもが蓄えた語彙（ボキャブラリー）のなかに入っているのです。ですから名詞から始めたといっても、ある時点でプツンとそれを切り捨て、次に〝形容詞〟へというふうにしていくわけではありません。名詞が他にくらべ、具体的でなじみやすいため、そこからスタートしただけのこと。たとえ幼児にでも、言葉はあくまで社会で使われているままの形で提示されなくてはいけないのです。漢字が形容詞や動詞に移るからといって、名詞がそこで使われなくなるわけではありません。そこのところを理解していただいて次の遊び方に入っていきましょう。

〈信号ごっこ〉

「赤い、黄色い、青い」の三つの色を、信号を通して漢字で示してみるものです。普段の生活のなかで、たとえば「信号が赤だから道路をわたってはいけません」というようないい方で、子どもは信号と赤（黄色、青）との関係、その色がどんな色か、などはすでに十分承知していることでしょう。その〝なじみある〟色を漢字で読ませてみるだけのことです。

信号の形を紙に画いて、そこに色を付け、漢字カードを見せながら、「これが赤、これが黄色……」と示せばいいわけです。と同時に、交通ルールについて少しお話をしてやりましょう。信号とその色の意味がより一そうわかることでしょう。

色の形容は、別に信号だけにこだわる必要はありません。いくらでも例は出てきます。「苺は赤い」「牛乳は白い」「髪の毛は黒い」……。折にふれ漢字カードで示してみてください。

〈組み合わせ遊び〉

名詞と、形容詞あるいは動詞を組み合わせて遊んでみましょう。「山は高い」「雨が降る」といった具合に。ここで注意したいのは、とくに形容詞の場合、漠然と「大きい、遠い、明るい、低い……」などと示さないで、〝対〟になるような方法――「大きい―小さい、遠い―近い」――でカードを読ませてみることです。これは〈組み合わせ遊び〉の次にくる〈反対語ゲーム〉の伏線になるのですが、〝対〟にして遊んだ時の言葉の持つおもしろさ、楽しさが浮き彫りにされ、興味が増すからです。

（例）形容詞

山は高い
谷は低い
自動車は速い
三輪車は遅い
夏は暑い
冬は寒い

（例）動詞

服を着る
服を脱ぐ

赤ちゃんが泣く
赤ちゃんが笑う
朝 起きる
夜 眠る

もし、形容詞や動詞の漢字に親しみにくい場合には、前の例のような普通名詞を使う前に、固有名詞を使って、より身近な雰囲気のなかで遊んでみるのもおもしろいでしょう。

(例)
富士山は高い
新幹線は速い
お父さんの手は大きい
お母さんの手は小さい
お友だちの○○ちゃんが好き



〈組み合わせ遊び〉の〝レパートリー〟が増え、慣れてきたら、子ども自身にやらせてみましょう。組み合わせが十種類くらいになるようにカードをバラバラにしておきます。ヒントを与えながら、組み合うようにカードを拾わせてみましょう。

〈反対語ゲーム〉

高い―低い、甘い―辛い、長い―短い、行く―帰る、泣く―笑う……など反対の意味を表わす漢字で遊びますが、単にカードを見せて読みあげるだけでなく、まとまったお話のなかで、子どもにとって印象に残る方法で試みるとより効果的です。たとえば、子どもが幼稚園や学校で、身体測定、健康診断などを受けたりしたら、それを題材にしてみます。

(例) 健康を題材に

(1) 食べものの好き嫌いが健康にとって良いのか悪いのかを話す。
(2) 体重測定のことで、重い 軽いの意味を話し合ってみる。
(3) 視力検査のとき右の目と左の目ではどちらが良く見えたのか、などを引き合いに出して、「右」と「左」の意味について話し合ってみる。

カードをバラバラにしておいて、〝対〟になるように拾わせてみたり、お母さんが何枚かのカードを持ち、たとえば「高い」のカードをサッと見せ、子どもが「低い」のカードを探し出す、といった遊び方もできます。

いろいろな〝対〟のカードを使っていますと、子どもにとって少しわかりにくく混同しがちなものも出てくるかも知れません。「大きい」と「多い」、「小さい」と「少ない」、「早い」と「速い」などがその代表例でしょう。そのさい、あまり言葉の意味自体に深入りせず簡単に答えておきましょう。「象は大きい、蟻が多い、朝起きるのが早い、自動車は速い」と、文章にして例示する方がわかりやすいものです。

〈同音異義語でお話づくり〉

ここでは、子どもが混同しがちな漢字をむしろ積極的に使って遊んでみます。やはり言葉そのものの意味や意義にとらわれず、文章として理解させるため、ごく短いお話をつくったりつくらせたりして楽しんでみましょう。

（例）

朝起きて厚いパンを食べました。
夏のお日さまはとても暑いです。
熱いお湯には気をつけましょう。

オモチャを買うのはうれしい。
小鳥を飼うのは楽しい。

「泣く」と「鳴く」、「切る」と「着る」なども、こんなふうに遊んでみましょう。

4 ある程度漢字を覚えたら……こんな楽しい遊び方がある

次には名詞、形容詞、動詞といった文法上の分類に沿った遊び方、進め方などに全くとらわれずに遊んでみましょう。ただし、読める漢字の数が一定数に届いていないと、少しむずかしいと思われま

すので、あまり無理をしないでください。子どもにとって、わからない漢字ばかりが出てきますと、〝強いられた学習〟になってしまい、〝遊び〟の要素が薄められて苦痛に感じられてしまうからです。そこのところをよく判断してから始めてみましょう。

〈へん（偏）とつくり（旁）で漢字づくり〉

漢字を構成する要素である「へん」（字の左側にある部分）と「つくり」（右側）とを組み合わせて字をつくってみる遊びです。とくに魚へんや木へんは文字数も多く、子どもになじみの深いものがたくさんありますから、それらを使ってみましょう。紙に漢字を書き、あらかじめ読めるかどうかを再確認しておいて、それをへんとつくりに切って分けておきます。

（例）魚の名前づくり

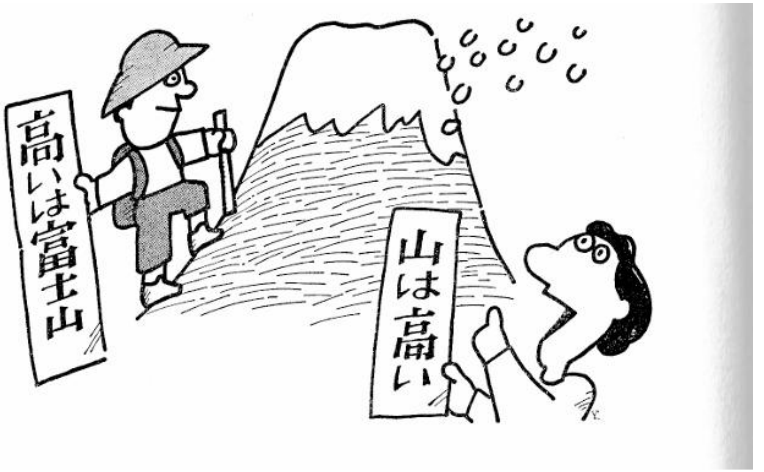
鯉（こい）―→魚と里
鯛（たい）―→魚と周
鯖（さば）―→魚と青
鰯（いわし）―→魚と弱
鮭（さけ）―→魚と圭

（例）いろいろな木

杉―→木と彡
桜―→木と~~女~~
梅―→木と毎
挑―→木と兆
楓―→木と風

これらのカードを、へんとつくりで、それぞれ左右に分けておいておきます。「〝こい〟の字はこれとこれでつくられるのよ」と初めはお母さんがお手本を示してみましょう。それから、「では〝すぎ〟の字をつくってみようね」とつくらせてみます。ジャンケンで勝った方がつくるとか、変化をつけて楽しんでみましょう。

木へん、魚へんに限らず、しんにゅう（辶）、にんべん（亻）、さんずい（氵）、草かんむり（艹）など、漢字を構成する共通の部首にはこと欠きません。どんどん試してみましょう。（本巻5「漢字は生



きている」に詳しく解説してあります。）

〈しりとり漢字〉

連想ゲームにも似たこの遊びは、簡単な文章のなかに、これまでに読めるようになった漢字をふんだんに取り入れて楽しいもの。でも少しむずかしいかも知れませんので、最初は、お母さんが文章をつくって、それを漢字で示し、一緒に読んで要領を理解させておくとよいでしょう。

（例）

山は高い―高いは富士山―富士山には雪―雪は白い

かぜにかかったら病院へ―病院では注射―注射は痛い

―痛いと涙

〈すごろくゲーム〉

全く無作為に、漢字カードを二十枚くらい選びます。それを順番に並べて最後のカードを〝上がり〟のカードとしておきます。そしてサイコロを用意し、ふります。出た目の数だけ進んでそこのカードを読みあげます。お母さんも一緒に、交互にやってみてください。早く上がった方が勝ちというわけです。おもしろがるようでしたら、カードの数をドンドン増やしていってみます。読めない漢字が出たら、サッと読んであげ、なるべくゲームのリズムを崩さないで続けましょう。もし、お正月に使ったようなすごろくがあれば、そのひらがなの部分に漢字を貼り付けて使ってもおもしろいでしょう。

〈お話づくり〉

組み合わせると簡単なストーリーになるような漢字カードを何枚か用意し、それを使って短いお話をつくらせてみましょう。よくなじんでいるようなカードを使ってやりますが、たとえ五枚準備し、そのうち二枚しか使えなくても、まったく構いません。慣れてきて、知っている言葉が増えるにしたがって、おのずと多くのカードを〝駆使〟できるようになります。あせりは禁物です。

（例）

※用意するカード 春、花、咲く、草、野原、歩く

春になると花が咲く

草もはえる 野原を歩くとわかります

諺（ことわざ）と俳句はおもしろい〉

一番最後に諺と俳句を取りあげてみました。日本人になじみの深い数々の句は、大へんリズミカルで覚えやすく、内容も含蓄に富み、ゆかいで楽しいものです。子どもにとっても、それは全く同じことなのです。それと、最後に取りあげたからといって、一番むずかしいのだろうとは絶対に思わないでください。たとえば、東京足立区の梅島幼稚園では、諺、俳句遊びに力を入れていますが、三歳児でも、何十という数の句を〝苦〟もなくスラスラと、おもしろがって競うように読んでいるのですから。

ここでは、その梅島幼稚園で子どもたちが楽しんでいるもののうち、調べた結果、とくに覚えやすいとわかったものをあげておきます。日常使っている言葉、あるいは、蟻、蛙、雀、猫、蜂など、身近にいる動物を取りあげた句、それにおもしろい言い回しのものに興味を持ち、喜んでいるようです。以下のような諺、俳句を紙に書いて、子どもの目につくところに貼っておき、ちょっとした機会に、一緒に大きい声で読みあげてみましょう。これまで読んだことのない、あるいは漢字カードにない漢字が出ていても、全然気にすることはありません。子どもは、まるで構わずバリバリと読み始めるでしょう。



（例）諺

犬も歩けば棒に当たる

鬼の目にも涙

娃の子は蛙

猿も木から落ちる

棚からぼたもち

塵も積もれば山となる
泣き面に蜂
猫に小判
花より団子
目の上のたんこぶ
袋の中の鼠
笑う門に福来たる
親の心子知らず
負けるが勝ち
時は金なり
七転びハ起き

(例) 俳句

松尾芭蕉・作

山路来て 何やら床し すみれ草
古池や 蛙飛びこむ 水の音
面白し 雪にやならん 冬の雨
ほろほろと 山吹散るか 滝の音
荒海や 佐波に横たう 天の川
竹の子や 幼き時の 絵のすさび
秋深き 隣は何を する人ぞ
名月や 池をめぐりて 夜もすがら

与謝蕪村・作

春の海 終日ひねもす のたりのたりかな

静けさに 堪えて水没む たにしかな

小林一茶・作

夕月を 取ってくれろと 泣く子かな

雪とけて 村いっぱいの 子どもかな

やせ蛙 負けるな一茶 これにあり

雀の子 そこのけそこのけ お馬が通る

我と来て 遊べや 親のない雀

蟻の道 雲の峰より 続きけん

やれ打つな 蠅が手をすり 足をする

なんとも調子が良く、楽しく覚えられそうでしょう。ただ、これらの句を最初からまとめて多くを読ませたりはしないように、一日一句をメドにやってみてください。興味を覚え、「もっと、もっと」と子どもから要求が出たら、しめたもの。そうしたら数を増やして読んでみましょう。

俳句は、よく覚えたものなど、上、中、下の句を三枚バラバラのカードにして、組み合わせ遊びをしても大へんおもしろく楽しめます。一枚のカードを見て、残りの二枚をつなぎ合わせて取ったり、全部バラバラにしておいて、上の句からつなぎ合わせてみたり、いろいろにやれます。工夫をして十分に楽しんでください。

おわりに

今までたくさんの遊び方が出てきました。繰り返しになりますが、この遊び方の順序は、決して不動のものでもなんでもありません。子どもの親しみやすいものから順を追ってならべてみただけのことです。子どもの興味、関心が高く、ゆかいに楽しめそうな遊びからドンドン入っていきましょう。

また、一応、お母さんと子どもが〝一対一〟で遊べるような形を前提に遊び方を例示してみましたが、兄弟、親戚、近所の子どもたちも一緒になって、人数を多くして遊ぶときにも、遊びの基本パターンは同じことですから、ちょっと応用してやってみてください。なかには、複数で遊んだ方が楽しく、効果的な方法もたくさんあります。競い合うおもしろさが、ゲームの楽しさを倍加するというわけです。

いずれにしても、これらのゲームを〝勉強〟と考えてはいけません。できる、できないを気にした

り、子どもに要求することは絶対に避けてください。そのかわり、子どもが〝できたら〟心からほめてやりましょう。一日わずかの時間でも、子どもにとって、こうした親との共同の遊びは、何よりも楽しく、何にもかえがたい経験となるでしょう。

さあ、今から、子どもと一緒に、「漢字で遊ぶ」おもしろさを味わってみてください。

（構成・双柿舎 協力・梅島幼稚園／かわい学園／ひかり幼稚園）